

異文化理解の観点からみる英語の変化

西原 哲雄

1. 英語の歴史

研究者によって、意見が異なることがあるが、松浪(1986)によれば、一般的に英語を歴史的に見る時は、古期英語 (Old English: OE)、中期英語 (Middle English: ME)、近代英語 (Modern English: ModE) の3つ時期に分けるのが一般的であると、述べている。そして、年代に関しては、古期英語が700年ごろから1100年ごろまで、中期英語は、1100年ごろから1500年ごろまで、近代英語はほぼ1500年以降であると指摘している。そして、松浪(1986)は言及していないが、一般的には1500年ごろから1600年ごろまでを初期近代英語 (Early Modern English: EMoDE) とし、1700年ごろから1800年ごろまでを後期近代英語期 (Late Modern English: LModE) とすることが、一般的であり、初期近代英語期の英語を代表する作家はもちろん、かの有名な William Shakespeare (1564-1616) であり、現代英語期については、1900年以降の英語を現代英語 (Present-day English: PredE) とすることが一般的であると考えられる。

一般的に、英語 (古期英語) はゲルマン語派に属しており、その中の1つの方言である、西ゲルマン語グループの1言語であった。同じグループには、現代のフリジア語 (オランダ北西部の方言)、ドイツ語、オランダ語、フラマン語 (オランダ語のベルギー方言) などが属している。そして、英語 (現代英語) に一番近い言語は、フリジア語であるということは、ほとんどすべての研究者が認める周知の事実である。

2. 古期英語の特徴

伊藤(2003)によれば、古期英語の方言は主に、4つに分けられ、マーシア方言、ノーサンブリアン方言、ケント方言、西サクソン方言であり、現代の標準語は、政治や経済の中心地であるロンドン周辺のマーシア方言であると、述べている。また、古期英語はゲルマン語としての特徴をしっかりと保っており、語彙もほとんどがゲルマン語起源のものであったが、古期英語の大部分は後に侵入してくる外国語からの借用によって失われることになるが、以下にしめすような、身近な日常語だけは残存したと、指摘している。それらは、man, wife, child, house, eat, drink, sleep, day, sun, eye, foot, など(伊藤 2003: 45) である。そして、伊藤(2003)は、ブリテン島をおよそ400年にわたって支配したローマ人の言語であるラテン語から借用された語が、以下のようにあるとも、指摘している。それらは、street, butter, dish, wine, angel, candle, school, など(伊藤 2003: 45) である。伊藤(2003)によれば、8~11世紀にかけてイギリスを侵略した海賊であるバイキング (Viking) が使用した古ノルド語からの借用語で、日常生活語として借用され、現在も使用している語があると、以下のように、述べている。それらは、sister, window, egg, sky,

skin, ill, call, die, get, give, など(伊藤 2003: 45)である。

Gary (1992)によれば、古期英語と古ノルド語はそんなに異なった言語ではなく、多くの単語が類似しており、綴り字 sk- で始まるような、sky, skin, skill というような単語は、古ノルド語によるものであり、綴り字 sh- で始まる、ship, shall, fish というような単語は古期英語からの単語であると述べられており、上記で指摘されている伊藤(2003)の主張と合致するものである。

古期英語の発音については、松浪(1995)によれば、原則的に綴り字通りに、発音すれば、問題ないとしており、例えば、Gardena は [ga:rdena] と発音すればよいと述べている。

古期英語の統語論(文法)については、現代英語の語順とはかなり異なる点があり、松浪(1986, 1995)によれば、古期英語は語尾の屈折によって文法的関係(主語と目的語の区別)を簡単に表すことができ、語順は現代英語よりもはるかに自由であり、語順は文法関係を表す手段としては機能していなかったと、述べている。そして、古期英語では SOV の語順が普通であったが、後期の古期英語になると SVO の語順が目立ってきたとも述べている。

3. 中期英語の特徴

中期英語においては、伊藤(2003)は、1066年にノルマンデー公ウィリアムがイギリスに攻め入り、ノルマン人(フランス人)が数百年にわたってイギリスを支配することになり、イギリスの言語や文化に多大な影響を与え、イギリスでは以後300年の間、フランス語が公用語となったと、述べている。また、語彙においても、beef, mutton, pork, などのフランス語からの多くの借用語を受け入れることになった、とも指摘している。

また、文法について、伊藤(2003)では、1) 語尾変化の単純化、2) 語順(SVO)の固定化、3) 機能語(前置詞、助動詞の発達など)の発達があり、これらの変化によって、語順が固定化されることになったと、述べている。

4. 近代英語期

この時代における、おおきな英語史としての変化は、大母音推移(Great Vowel Shift: GVS)と呼ばれる1350年ころから1600年ころにかけて起きた音韻変化であると言える。これは、英語の長母音のすべてがその調音位置を一段づつ上昇させたものである。伊藤(2003)から、抜粋すると、name [a:] → [ei], see [e:] → [i:], child [i:] → [ai], moon [o:] → [u:], house [u:] → [au], などの変化である。この音変化にも関わらず、綴り字は印刷技術の発達によって固定化され変化しなかったため、発音と綴り字の間にずれが生じることになり、現代英語においてもこれは、大きな問題となっているのである。伊藤(2003)はまた、統語論(文法)では比較級や最上級の迂言法(more, mostの使用)や、助動詞doの発達が起きた、と述べている。

5. 英語史的变化と現代英語の変化における分析

前章までに、英語史の観点から、英語の変化を見てきたが、今章においては、それらの変化と現代英語の変化の関わりをさらに広い観点（言語学的かつ、異文化的観点及び言語類型論的観点）から詳細に分析する。

まず、語順について検討をするが、酒井(2002)は、日本語、朝鮮語はSOV、英語や中国語はSVOであり、ドイツ語はSV0/SOVの形をもち、ウェールズ語はVSO、マダガスカル語は、VOSであると述べている。しかし、英語は上記で述べたように、ゲルマン語に属する言語なので、その他のゲルマン語と語順を比べると、河崎(2006)は、次のようなデータを提供している。すなわち、ゴート語（死語）SOV/SVO、英語SVO、ドイツ語SV0/SOV、オランダ語SV0/SOV、スウェーデン語SVO、アイスランド語SVOであり、基本的にゲルマン語の語順の特徴であるV2現象(Verb Second)をここで述べられているすべての言語が満たしていることがわかる。では、この英語のSVOという語順が世界の言語から見た場合、すなわち、類型論的観点からはどうなのかを見ることにする。最新のデータである、Matthew(2005)によれば、調査対象1228言語中、(1)SOV 497(40%)、(2)SVO 435(35%)、(3)VSO 85(7%)、(4)VOS 26(2%)、(5)OVS 9(1%)、(6)OSV 4(1%)、(7)特定の語順を指定できないもの172(14%)となっており(60年代から70年代にかけてGreenberg, Ultan, Steeleなども同様の調査を行い、それら調査結果もほぼ同じ数値を示しているが、彼らの対象とした言語数は、100言語前後と非常に少ないので、ここではそれらのデータは採用しない)、英語の語順であるSVOも日本語の語順SOVも世界の言語という観点からみれば、いずれも特殊な語順ではなく、多数派(第1位と第2位)であり、一般的に見られる語順であるということが出来る。英語史で見られる英語の語順の変化である、SOV → SVOも一見すれば、大きな変化と見られるが、類型論的観点から見れば、一般的な語順から一般的な語順への変化であり、英語という言語が特殊であるという見解は見出されないと、考えられる。

音声面においても、松本(2007)によれば、音声学という流音に属する側面音(lateral)[1]とr音(rhotic)の2種類があるが、ヨーロッパのすべての言語、またアジア大陸のほとどの言語は、その音韻体系に、/l/と/r/という少なくとも2種類の音素を区別しており、日本語は、奈良時代からラ行子音と呼ばれるもの1種類しかなく、英語やスペイン語のように流音と呼ばれる音種に側面音とr音の少なくとも2種類の音素を区別するタイプを複式流音型、日本語のように、そのような区別を持たないタイプを単式流音型、そして、まれであるが、側面音とr音を問わず、自立した音素として流音を持たないタイプを流音欠如型と名付けており、これらの出現頻度は、複式流音型が52%、単式流音型が42%、流音欠如型が6%で、あると指摘している。これらのデータから、r音に関する日英語の違いというものもまた、類型論的観点から見れば、決して特殊なものではないと言える。しかし、英語のみ現代における変化に目を向けてみると、以外な現象に気づくことになる。それは、Trudgill & Hannah(2008)によれば、イギリス英語において、paw, pore, poorの発音について世代間で相違が生じていると述べている。老年世代の発音はすべて3つの単語の発音

を区別するが、若者世代の発音はすべての単語に同じ発音を用いて、区別しないと指摘している。Ogden (2009)によれば、もちろん、アメリカ英語においては、これら3つの単語はすべてを区別して発音されていると、述べられている。イギリス英語の若い世代における3つの発音の区別の消失は、Martinet (1962)が主張している、話し手が自分の伝達内容を伝えるのに、自分の目的の達成をそこなわないかぎり、最小努力の原理(principle of least effort)、すなわち、精神的、肉体的エネルギーを最小限にする、という原則によって説明は可能である。さらに、これは Sapir (1921)で主張されている、言語は1つのまとまりとして、歴史の流れにしたがって、ゆっくりと一定方向に変化すると述べた偏流(drift)によっても説明はできる。しかし、コミュニケーションという観点からすれば、若い世代のイギリス英語は、将来的に同音異義語が増えることで、そのコミュニケーションに障害が生じることになるのではないかと推測することもできる。

6. 結語

英語の歴史的な変化を概観しながら、現代英語の変化や特徴を異文化理解の観点(言語学および、類型論的観点など)から考察した。そして、若林(2009)の言葉を借りれば、大切な点は英語のシステムの中には、普遍的な部分と変化しやすい部分が併存していることを理解することである、と結論づけることができる。

参考文献

- Gary, B. (1992) *The History of the English Language in Simplified English*. Eichosha.
- 伊藤 克敏(2003)「英語学の世界」 『英文学と英語学の世界』 お茶の水書房. 43-66.
- 河崎 靖(2006)『ゲルマン語学への招待』現代書館.
- 松本 克己(2007)『世界言語の中の日本語』三省堂.
- 松浪 有編(1986)『英語学コース1 英語史』大修館書店.
- 松浪 有編(1995)『テイクオフ英語学シリーズ1 英語史』大修館書店.
- Martinet, A. (1962) *A Functional View of Language*. Clarendon Press.
- Matthew, S. (2005) "Order of Subject, Object, and Verb." In Haspelmath et al. (eds.) *The World Atlas of Language Structure*. Oxford University Press. 330.
- 中尾 俊夫(1989)『英語の歴史』講談社.
- Ogden, R. (2009) *An Introduction to English Phonetics*. Edinburgh University Press.
- 酒井 邦嘉 (2002)『言語の脳科学』中公新書.
- Trudgill, P. & J. Hannah (2008) *International English Fifth Edition*. Edward Arnold.
- Sapir, E. (1921) *Language*. Harcourt, Brace & World.
- 若林 茂則(2009)「海外新刊書紹介 *International English Fifth Edition*」『英語教育』5月号 大修館書店. 92.